

## S-7

### 地域連携システム導入後の地域連携室業務状況と導入効果について

旭川赤十字病院 地域医療連携室<sup>1)</sup>、  
医療情報課<sup>2)</sup>、副院長<sup>3)</sup>  
○大京寺 敦子<sup>1)</sup>、森谷 幸治<sup>1)</sup>、小松 比左志<sup>2)</sup>、  
岡本 栄治<sup>2)</sup>、山田 浩貴<sup>2)</sup>、牧野 憲一<sup>3)</sup>

【はじめに】2008年度より電子カルテ情報公開機能を有する地域連携システムを導入しており、昨年の本学会において地域医療連携室での業務内容の変化等について発表を行った。今回は本システムにかかる現在の業務状況並びに導入効果について報告する。

【取り組み】本システムの特徴は、当院電子カルテの情報をセキュリティーを確保したインターネット回線を利用し地域の医療機関が参照できる事である。また、紹介状・逆紹介状の管理機能、双方向での記載が可能な地域連携パス機能も有している。オンラインである本システム導入後より連携室では従来の紹介・逆紹介状・返書管理の他に、導入医療機関へのカルテ公開許可作業・パスの連携医療機関への書込設定作業を行っている。本システム導入医療機関は現在100施設に増加している。(うち、パスの連携医療機関は12施設)電子カルテ情報公開設定作業を行う患者数も増加しており、2008年度6,650人2009年度8,635人と23%増加している。地域連携パスの書込設定作業については、月平均30件程度の転院患者が対象となっている。また、システム導入効果として紹介件数の増加が上げられる。当院が受けた紹介患者件数は2007年度11,399件、2008年度12,316件、2009年度12,310件(精神科の休診に伴い紹介をセーブ)であるが、本システム導入医療機関(100施設)でみると、2007年度4,556件、2008年度4,950件、2009年度5,124件と導入前後で比較すると11%増加している。

【今後の課題】更なるシステムの活用をめざし、連携先医療機関との情報交換を行い利用しやすいシステムへの検討が必要であるとともにシステム利用医療機関を増やす事が必要と考える。

## S-8

### 地域連携システムを利用した当院の地域連携パスについて

旭川赤十字病院 医療情報課<sup>1)</sup>、  
旭川赤十字病院 地域連携室<sup>2)</sup>、  
旭川赤十字病院 副院長<sup>3)</sup>  
○山田 浩貴<sup>1)</sup>、小松 比左志<sup>1)</sup>、森谷 幸治<sup>2)</sup>、  
牧野 憲一<sup>3)</sup>

平成20年4月から運用を開始した当院の地域連携システムは、地域連携室基本機能、診療情報提供機能、電子カルテ公開機能、地域連携パス機能を有している。平成20年1月より紙ベースで運用していた脳卒中地域連携パスが平成20年7月よりこのシステムで稼動となった。エクセルで作成されたパスシートは、セキュリティーを確保されたインターネット網(SSL-VPN)を介して連携(転院)先医療機関で参照、追記される。転院先医療機関では1ヶ月毎の患者評価(FIM)を行い、退院時のパス記載が完了するとオンラインで当院にデータがフィードバックされる。記載が完了した一連のパスデータは双方の連携医療機関で参照可能である。以前は郵送されてきたパスシートの内容を電子カルテに入力する作業があったが、システム運用によりパスデータの収集、分析が容易となった。

さらに平成21年10月からは大腿骨頸部骨折地域連携パスが新規運用開始となった。大腿骨頸部骨折地域連携パスは、地域連携システムでのオンライン運用を前提に連携医療機関と準備を進めていった。結果、紙ベースで情報提供されていた医師の情報提供書、看護添書、理学療法経過報告書、薬剤情報提供書を連携パスに組み込むことによって情報の重複が避けられ、かつ転院先医療機関に一元的に患者情報を提供することが可能となった。また、パスシートに入力期限を定めることで、MSWが転院先を調整する際の情報提供ツールになり、転院予定の連携医療機関では事前に連携パスシートが参照可能となるので転院準備がスムーズとなった。

今後も地域連携システムを中心として、連携先医療機関と協力してより使いやすい地域連携パス構築と、パス連携医療機関(現在12施設)の拡大を目指していきたい。